

幼保小の実りある連携のあり方について

所属校：足立区立竹の塚小学校
氏名：瀬戸口卓
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：幼保小連携・育ちの連続性・可能な連携の在り方

I 研究の目的

1 研究の意義と課題

近年の少子化の影響や、遊び場の減少や遊びの変化の中で、いわゆる異年齢間の交流はほとんどなくなってきている。

また、十数年前から、小学校での生活の変化に対応できにくい子どもの存在が顕著になり、小1プロブレムとして知られるようになった。この原因として、幼児期教育と小学校教育とのつながりが悪いためではないかという考えもある。そうならば、幼児教育と小学校教育間のなめらかな接続を図っていく必要がある。

国の動向としては、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「学習指導要領」が、改訂され、幼稚園・保育園と小学校の交流が義務づけられた。

しかし、幼保小の間の段差をなくすことがよいことなのか、段差を小さくするために、幼稚園や保育園で小学校教育を先取りしたり、小学校で園教育を取り入れたりするのがよいことなのか、また、交流をすすめて行く上での注意点は何かなど、疑問や課題も少なくない。

自分が勤務している区でも幼児教育振興計画を策定し、様々な取り組みを行っている。しかし、区内全域の小学校で取り組むという状況にはまだ至っていない。

そこで、本研究では、全国の多くの自治体の先行実践と所属校との現状をつき合わせ、より効果的、効率的な近隣の幼稚園・保育園との「交流」「連携」「接続」のあり方を提案することを課題とした。

2 研究の視点

以上の課題に応えるために、まず研究の視点を次のように定めた。

- (1) 幼保小の連携の意義はどこにあるのか
- (2) 幼稚園・保育園・小学校の三者に実りある連携のあり方とは何か
- (3) 所属校における可能な連携の在り方とは何か

II 研究の方法

1 研究の手順

- (1) 幼保小連携の問題点を全国の先行実践から列挙し、その解決を研究の出発点とする。

- (2) さらに幼保小連携の先行研究と、先行実践例を収集し、読み込んでいく。
- (3) 先行研究と先行実践の中から取り組みの意義と効果が大きいと思われるものを抽出する。
- (4) 連携の先行実践の中から、所属校でも可能な実践を抽出していく。
- (5) 所属校で可能な交流プログラムやスタートプログラムの開発に取り組む。
- (6) 書く取り組みの意義、内容、期待される効果をまとめる。
- (7) まとめたものを基にして、幼保小連携推進のためのリーフレットを作成する。

III 研究の結果

1 幼保小連携の意義はどこにあるのか

(1) 背景

①子どもを取り巻く社会の変化

少子化がすすみ、保護者とその子どもに多くの期待を寄せ、毎日のように習い事や塾に通わせる傾向がみられる。その結果、放課後の遊び仲間がいない現状、さらに、児童が巻き込まれる事件の発生など地域での安全性の確保も難しくなっている。また、遊びの形も異年齢の集団遊びから、ゲーム機などで遊ぶ個別の遊びが主流を占め、地域社会で子どもが遊ぶ姿がほとんど見られなくなっている。

地域社会の崩壊は、子育て家庭の孤立化を生み、悩みがあっても相談する相手も見つからず、子育ての不安や疲労感、ストレスを増大させている。かつては地域の大人が子ども達を見守り、社会のルールなどを伝えてきたが、近年の見て見ぬふりをする大人社会が子どもの成長に影響を及ぼしている。

②子どもの生活や育ちの変化

近年の少子化は保護者の過干渉を生み、自分のことは自分でするという体験が不足がちになっている。このことは、基本的な生活習慣を身につけていくには大きな問題となっている。また、家庭や地域で人とかかわる体験が減る傾向により、人とかかわる力が弱くなってきている。このような人とかかわる体験の減少は言葉の発達の面でも影響を与え、自分の思いをうまく

相手に伝えられないいらだちを生むことにつながっている。

(2) 必要性

① 子どもの発達連続性

もともと、子どもの発達は、幼児教育と小学校教育とで区切れるものではなく、連続しているものである。しかしながら、子ども自身は様々な経験不足を抱えている場合が多く、それに伴った多くの課題を生じさせている。その不足している経験を補うため、幼稚園・保育園・小学校の教員や保育士は、一人ひとりの子どもに必要な経験を幼児期だけでなく、児童期でも経験できるようにする必要がある。

② 幼児教育と小学校教育の段差

幼稚園や保育園の5歳児は年長児として扱われ、自分たちも自信をもってそのように振る舞い、周りの期待に応えようとする意欲が育っている。そして、小学校では更に自分のできることが増え、喜ぶを感じるだろうという思いを抱いている。しかし、実際は小学校では赤ちゃん扱いされるのがほとんどである。発達の連続性を保つには、子どもの期待感を裏切らないようにする必要がある。また、幼稚園や保育園では「たくさん遊びましょう」と言われ、小学校に入ると「遊んでないで勉強しなさい」という状況に変化する。この大きな違いも子どもたちにとっては段差になっている。

(3) 意義

① 幼児教育

遊びを通して身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い、「後伸びする力」を育てている。

② 小学校教育

時間割の基づき各教科等の内容を年間や単元の指導計画の下で教科書などの教材を用いて指導をしている。

お互いの教育内容について理解を深めることは、各校や園の役割を再確認できるとともに、新たな発想や取り組みのきっかけとなる。そのことは、学校や園が活性化し、幼児・児童の幅広い経験を生み、幼児や児童の豊かな人間形成につながる。5歳児の担任は1年生を知ることで、小学校につながる保育が可能になり、1年生の担任は5歳児のことがわかっていれば、幼児教育で生まれた「後伸びする力」を意識したカリキュラムを編成することも可能になる。

2 幼稚園・保育園・小学校の三者に実りのある連携
幼児教育と小学校教育がなめらかに接続していった

めには、それぞれの教育の特性と共通性を踏まえ、つながりを考えていくことが大切である。そのためには、連携体制を整え、研修会の充実や相互参観の実施等を通して、教育観・保育観・子ども観の相互理解をすすめる、連携の意識化を図ることが重要である。また、保護者との連携のための情報収集や提供、関係機関からの支援などを受け、三者の連携の充実を図って行くことが重要である。

3 所属校における可能な連携のあり方

(1) 幼保小連携ブロック会議

区内を13ブロックに分け、年度毎に課題を設定し、情報交換だけでなく、幼稚園・保育園・小学校が協働して課題に取り組む会議を開催している。

(2) 近隣の幼稚園・保育園との連携

①園との情報連絡会

3月の情報連絡会の時に、次年度の交流計画を作成する。まずは、お互いの行事への参加を計画し、交流授業へと発展させる。

②幼保小連携ブロック会議の活用

年3回行われるこの会議で、それぞれの園や学校の実情を理解し合い、実態に見合った交流や授業をつくり上げていく。

③職員間の交流

園や小学校で行われる研究授業等を互いに参観し合い、共通な視点での協議会をもち、相互理解を図っていく。

IV 考察

(1) 交流給食：幼保小連携ブロック会議の場で日程調整を行い、3つの園と交流給食を行った。時間を確保する手段として会議がとても役立った。

(2) 交流授業：1年生の生活科の時間に年長児と交流する単元を設定し、2つの園と交流授業を行った。年間計画に位置付けることが大切だと感じた。

(3) 交流プログラム：学校行事・生活科・総合的な学習の時間・教職員の交流の4観点でまとめた年間指導計画型の交流プログラムを作成した。他の小学校でも使用できるよう留意した。

(4) スタートプログラム：4月入学当初より3週間分のカリキュラムを生活科を軸として、15分間のモジュール型で作成した。適応指導をどのように扱うかは課題として残った。

(5) リーフレット：今から交流活動を始める学校用に、交流活動から始め、一連の流れがわかるように作成した。情報量を少なめにしたことで見やすくなった。